

# 「えほん meets 博物館」の実践による 博物館利用の促進

## ～地域文化の核としての博物館が機能するには？～

独立行政法人国立科学博物館 事業推進部 学習課 小川 達也  
渡邊 百合子  
赤尾 萌  
茂田 由起子  
柴田 美奈子

### 1. はじめに

国立科学博物館では、平成27年7月のリニューアルオープンにおいて展示室「親と子のたんけんひろば コンパス<sup>1</sup>」(以下、コンパス)を開設した。未就学世代の科学リテラシー涵養を目的としたコンパスでは、展示室のコンセプトを踏まえたプログラムを開発、発信している。平成27年度に開発した「えほん meets 博物館」もこうしたプログラムの一つであり、子供に身近な絵本を用いた展示観覧という手法を提案し、未就学児とその保護者の積極的な博物館利用を促すことを目的としている。全国の博物館で同様の事業が広がり、未就学児向けの事業の契機となることを目指しており、これまで他館での実施も含め計12回開催している。

ここでは、「えほん meets 博物館」のコンセプトおよび実施事例について紹介する。また、本研究発表大会のテーマである「地域文化の核となる博物館」に照らし、本プログラムを実践することで、博物館が地域文化の核としてさらに機能することへの考察をおこなう。

### 2. 「えほん meets 博物館」のコンセプト

「えほん meets 博物館」は、「絵本を持って博物館をまわってみよう」をテーマとし、絵本に関連付けた博物館観覧の手法を、未就学児を持つ保護者や教育関係者へ提案することで、これまで博物館に来たことが無い未就学児とその保護者を博物館に呼び込み、絵本を介した博物館の新たな楽しみ方を提案し、博物館体験を家庭に持ち帰ることで、未就学児の学びを深めていくことを目的としている。開発にあたっては、

1 平成27年7月に開設した「コンパス」は、主に4～6歳の未就学世代とその保護者を対象にした展示室である。対象設定の理由としては、近年の当館(上野地区)来館者のうち約1割が個人利用の未就学世代でありながら、従来の展示・学習支援活動のほとんどが小学生以上を対象としてきたことが挙げられる。展示室開発にあたっては、全国の科学系博物館の活動についての調査結果(※1)を参照し、未就学世代の科学リテラシーの涵養、特に「感性の涵養(感じる)」および「思考習慣の涵養(考える)」を目的とした。また、上記の目的のためには未就学世代にとって「外界との媒介者」となる保護者との共通した体験が重要であるという考えから、コンパスでは、子供と保護者が博物館体験をともにし、日常に持ち帰ることで、博物館や自然科学を身近に感じ、考える契機となることを目指している。

①豊かなイメージを持ち絵本と向き合えるよう、絵解きのように挿絵から物語を楽しむ方法を提示する

②繰り返し親子で絵本を共有する時間の中で次第に会話が豊かになるよう、担当編集者や監修者の思いなど絵本にまつわるバックグラウンドを要素として届ける

といった点を要とした。これは、文部科学省「幼稚園教育要領<sup>2</sup>」の言葉領域の取り扱いにおける「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結びつけたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにする」という留意点や、秋田（2008）<sup>3</sup>による「大人が子どもたちと絵本との出会いの場やコミュニケーション過程を通して絵本の世界に誘うことで、子どもは絵本の楽しさや面白さを知る」などの指摘を踏まえたものである。昨年度は国立科学博物館と蒲郡市生命の海科学館での実施内容について、全国科学博物館協議会第24回研究発表大会で報告を行ったが<sup>4</sup>、今年度は、蒲郡市生命の海科学館、そして初めての開催館として、島根県立三瓶自然館で実施をした。

この開催について、報告を行う<sup>5</sup>。

●「えほん meets 博物館『せいめいのれきし（改訂版）』in 生命の海科学館」

（平成29年7月、8月、10月 於：蒲郡市生命の海科学館）

●「えほん meets 博物館×『せいめいのれきし（改訂版）』」

（平成29年10月、於：島根県立三瓶自然館）

### 3. 開催事例の紹介

今年度開催を行った2つの館での事例について、報告を行う。

#### 3.1 蒲郡市生命の海科学館の場合

まずは、蒲郡市生命の海科学館での事例である。この施設は、愛知県の蒲郡市に位置し、JR蒲郡駅から徒歩3分の場所にある。近隣には蒲郡市博物館や竹島水族館などがある。この生命の海科学館は、“本物のいん石や化石にふれて、地球の歴史や生物のうつりかわりを学ぶことができる科学館<sup>6</sup>”として、地球の誕生や、地球に生まれ絶滅をした生物、あるいは姿

2 文部科学省：幼稚園教育要領、2008

3 秋田喜代美：絵本をめぐるコミュニケーション-親子の響きあい/やわらかアカデミズム・<わかる>シリーズ よくわかる乳幼児心理学(ミネルヴァ書房)、2008

4 全国科学博物館協議会第24回研究発表大会@京都鉄道博物館(2017.2.17)

5 今年度実施した「えほん meets 博物館」では、昨年度に国立科学博物館と蒲郡市生命の海科学館で実施をしたときと同様に、株式会社岩波書店の『せいめいのれきし（改訂版）』を用いて本事業を実施している。実施に当たっては、株式会社岩波書店に協力をいただく形で、使用許可や絵本の紹介パネルの掲出などを行っている。

6 蒲郡市生命の海科学館 HP より <http://www.city.gamagori.lg.jp/site/kagakukan/>

や形を変えてきた生物の化石を展示している。館内には、幼児から小学校低学年向けの「イクチオひろば」という貸出体験キットや科学絵本を楽しむことができるゾーンも存在する。

この生命の海科学館では、昨年度に1回「えほん meets 博物館」を実施したが、今年度は夏休み期間に開催された特別展「『せいめいのれきし』46億年、あなたにつながるストーリー」に併せて、3日間計6回の「えほん meets 博物館」を開催した。

日 時	対 象	参加者数
平成 29 年 7 月 17 日	(1) 未就学児とその保護者 および 未就学児をもつ教育関係者 (2) 小学生以上の子供とその保護者	(1) 17 名 (45 分間) (2) 21 名 (90 分間)
平成 29 年 8 月 10 日	同上	(1) 14 名 (60 分間) (2) 31 名 (90 分間)
平成 29 年 10 月 15 日	同上	(1) 28 名 (60 分間) (2) 11 名 (90 分間)

具体的な流れは下記のような形で実施をした。

- ①「イクチオひろば」での山中敦子館長による絵本の紹介
- ②展示エリアで絵本に関連する展示物を回り、ミッションシートに感じたことや考えたことを記入していく。(ツアーのような形で山中館長が解説し、展示物を観察したり触ったりしていく)
- ③山中館長による絵本の内容と展示物のつながりに関するまとめ



▲①の様子



▲②の様子

### 3.2 生命の海科学館での「えほん meets 博物館」の特徴

今年度の実施では、博物館だけで終わってしまうのではなく、家に帰っても参加した親子の会話を促し、学びを続けてもらうために、「えほん meets 博物館」の中で使ったワークシートを参加者が家庭に持ち帰れるようにした点に大きな特徴がある(著作権の関係する絵などは除く)。これは昨年度に同館で実施した際に出た気づきを活かしたものであり、参加者がイ

ベントに参加した時に感じ・考えたことを記載したワークシートを持ち帰り、このシートと絵本を元にして、学びを振り返ることが出来るようにしている。また、この特別展の開催期間中、「絵本を持ってミュージアムに行こう！」というキャンペーンを行い、絵本「せいめいのれきし」を持って博物館に来た来館者にはプレゼントを渡すことで、絵本に親しむ世代の来館やイベント参加者の再来館を促した。

実際に、「えほん meets 博物館」の参加者へのアンケートを取ってみると、蒲郡市内の参加者は少なく（およそ2割）、絵本という切り口に魅力を感じた愛知県内の他の市町村からの参加者が大半を占め、イベント後のキャンペーン期間中も参加者の再来館がある等、反響も大きかったことがうかがえる。参加者のアンケートからは、「絵本の内容が本当なんてびっくりしたと（子供が）言っていました。」「本の中にある物が実際にある事を知って、（子供が）喜んでいました。」「子供でもわかりやすい本を見ながら解説してもらいわかりやすいし楽しめました。」といった声が寄せられた。

### 3.3 島根県立三瓶自然館の場合

島根県の三瓶山のふもとに位置するこの三瓶自然館は、自然系の博物館であるとともに、大山隠岐国立公園三瓶地区のビジターセンターとしての機能も併せ持った施設である。三瓶の自然や埋没林についての展示をはじめ、日本海地域の成り立ちを展示で紹介している。また、フィールドガイドや天体観測施設も併せ持ち、三瓶山の散策や自然を楽しむための様々な情報や方法を提供している。この博物館にも「こどもはくぶつかん」という名称の未就学児や小学生を対象としたエリアがあり<sup>7</sup>、ハンズオンの手法を用いた展示物を配置して自然が持つ仕組みや生物の不思議を紹介している。

「えほん meets 博物館」は初めての開催であり、国立科学博物館の巡回ミュージアム<sup>8</sup>「かはくから恐竜がやってきた！」の関連イベントとして実施した。

日 時	対 象	参加者数
平成 29 年 10 月 22 日	未就学児～小学生の子供とその保護者	18 名 (90 分間)

具体的な流れは下記のような形で実施をした。

- ①「こどもはくぶつかん」での国立科学博物館真鍋真氏と三瓶自然館の遠藤大介氏による絵本の紹介
- ②展示エリアで絵本に関連する展示物を回る。  
(ツアーのような形で真鍋氏が主に解説し、展示物を観察したり触ったりする。)
- ③真鍋氏と遠藤氏によるまとめと、その他のオススメ絵本の紹介

7 島根県立三瓶自然館サヒメル HP 開館日時と料金・館内案内より「幼児の利用」ページ <http://www.nature-sanbe.jp/sahimel/institution/child.html>

8 この巡回ミュージアムは、平成 29 年度文部科学省委託事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」により実施をしたものである。



△①の様子



△②：展示物を触っているとき

### 3.4 三瓶自然館での「えほん meets 博物館」の特徴

今年度が初めての開催であり、「えほん meets 博物館」の基本コンセプトである“絵本という切り口で博物館を回る”ということを主眼にイベントを行った。実施の際には、近隣の博物館の学芸員の方、近隣の社会教育施設の職員の方、そして小学校の司書の方が見学に訪れている。この見学者3名と三瓶自然館の企画担当者、そして国立科学博物館からイベント実施に向いた職員との間で時間を設けて意見交換会を行い、今回のイベントの振り返りと、それぞれの見学者のフィールドでどのように絵本を用いた企画を行っているか、といった意見交換を行った。

「えほん meets 博物館」の参加者へのアンケートでは、参加の動機はゲストであった真鍋真氏と展示を回ることができるという点に集中していたが、「何度もサヒメルに訪れているが、新たな気持ちで展示を見ることができた」や「実際に話（解説）を聞きながら見ていくことで（展示を）深く感じられるようになった」など、絵本を通じて博物館の展示を見ていくという方法を体験したことで、この方法で博物館を回ることによって展示を見学する新たな方法を参加者が会得していることを示す結果となったと言える。

## 4. 地域文化の核として博物館が機能するには

今回、生命の海科学館と三瓶自然館それぞれが「えほん meets 博物館」を実施した目的は、「利用者層が低年齢化している」ことや、「多くの子ども（未就学児～小学生）が利用するニーズが見込める」といったものであった。未就学児を対象とした企画をどのように実施していくかという点や、未就学児にとって内容が難しいと感じられる常設展示を、どのように活用してもらうかという課題が今の博物館にあるのではないだろうか。

この点、「えほん meets 博物館」の目的である“絵本という切り口で博物館を回る”という発想は、参加者の子供にとっても、一緒に回る保護者にとっても有効であったということは参加者のアンケートから見受けられた。絵本というツールが、博物館に足を運ぶきっかけとなっていることや、博物館を見て回る時の“ガイド役”として活用できるということを知ってもら

---

う機会に成っているといえるだろう。また、今年度の生命の海科学館での実施においては、イベントの際にワークシート（著作権の関係する絵などは除く）を家に持ち帰ることができ、博物館のみならず、イベント参加後に家庭で振り返りができるようにしている。さらに言えば、「絵本を持ってミュージアムに行こう！」というキャンペーンを行ったことで、再度博物館に来館したイベント参加者も見受けられたことから、「えほん meets 博物館」の実施に併せて行ったいくつかの工夫は、来館者の継続的な学びを促し、家庭と博物館をつなげることになっていると言えるだろう。

情報発信や人材交流という点では、各実施館に近隣の博物館などからの見学者があったことを取り上げたい。近隣の博物館や社会教育施設などで絵本に興味のある方や、絵本を使ってすでに事業を実施したことのある方が見学に訪れ、意見交換が行われた。特に三瓶自然館の場合には、イベント終了後に意見交換会の時間を設けて、各施設での取り組みの紹介を行った。さらには、三瓶自然館の「えほん meets 博物館」担当者と社会教育施設の担当者として、従来からその地域で行なっている絵本のイベントに登壇し、「せいめいのれきし」と三瓶自然館のオリジナルかみしばいを用いてイベントを実施したという報告も挙がっている<sup>9</sup>。

絵本を扱う「えほん meets 博物館」という事業が、学びの拠点としての博物館の活用を未就学児とその保護者に広げていることは今年度の実践からも感じられた。そして、こうした絵本を使った未就学児向けの取り組みを行うことで、これまでつながりのなかった博物館と近隣の施設をつなげることを促し、情報交換や人材交流につながっていった事例が出てきたことが、本事業の新たな進展である。

地域の文化を担う核として博物館は、すでに多くの資料や人材という資源を持っているが、本事例においては、【絵本】が未就学児を対象とした博物館利用につながるという【ハブ】としての機能を果たしているとともに、他館や地域の施設・団体との【ハブ】を生み出すことにもつながったということが出来るだろう。今後、未就学児の利用を増やすことや、近隣施設とのつながりを活かして事業を実施していくことにつながれば、これまで以上に博物館の資料や人材を活かして、地域における文化発信の核として博物館が機能することにつながっていくのではないだろうか。

## ●謝辞

今回の「えほん meets 博物館」の実施に際し、蒲郡市生命の海科学館の山中敦子館長をはじめとする皆様と、島根県立三瓶自然館の遠藤大介研究員をはじめとする皆様に多大なるご協力をいただいたことに感謝申し上げます。また、本事業の三瓶自然館での「えほん meets 博物館」の実施は、平成 29 年度文部科学省委託事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」によるものです。関係者の皆様に感謝申し上げます。

---

9 「さんべ絵本フェスタ」というイベントで、地域協育ネットワークという団体が主催となり、毎年行われている。このイベントの中で、三瓶自然館が絵本『せいめいのれきし（改訂版）』と三瓶自然館のオリジナルかみしばいを用いてイベントを行なっている。